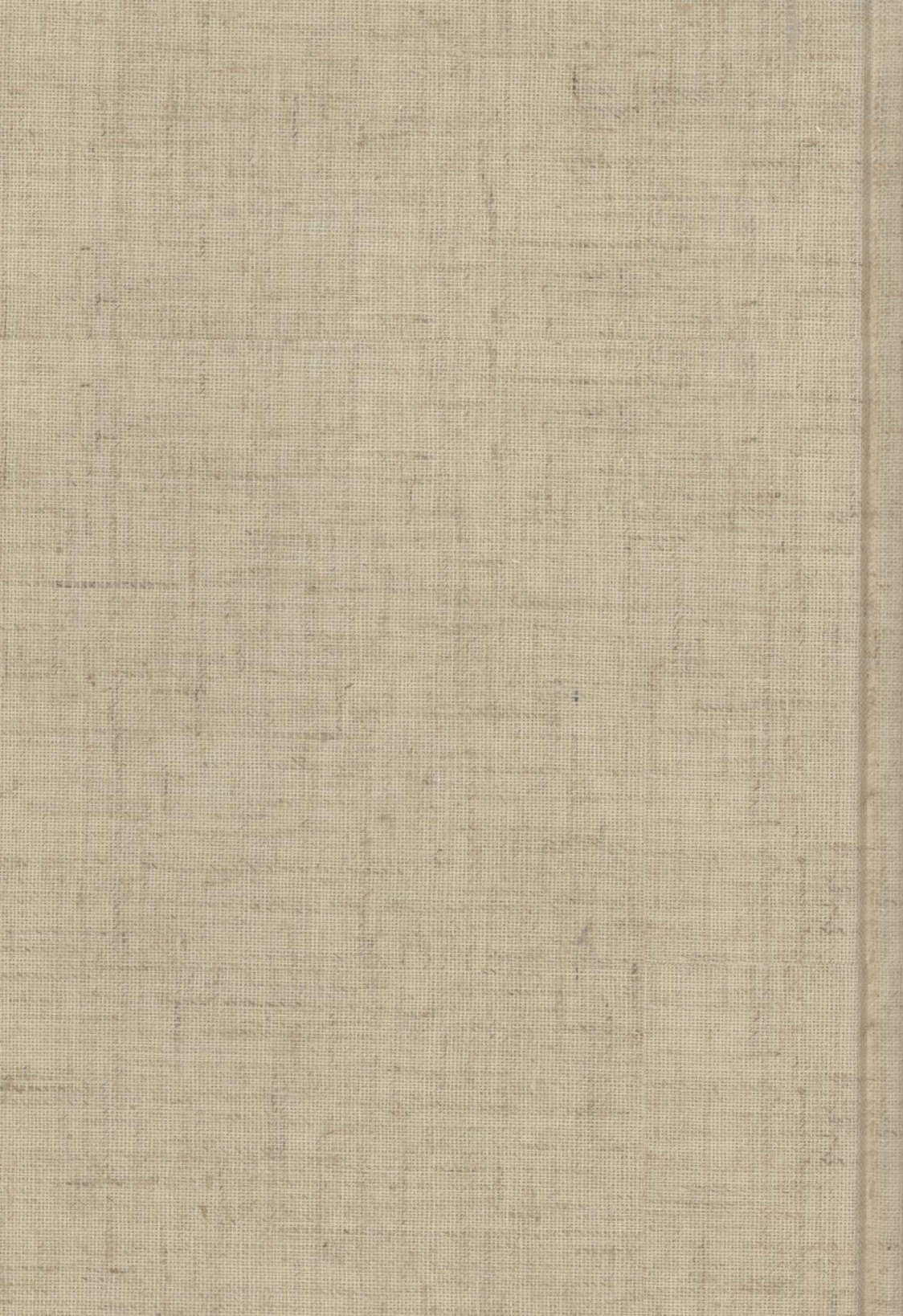




新村出全集

第七卷

筑摩書房

新村出全集第七卷

昭和四十八年六月十五日 第一刷発行
昭和五十二年五月三十日 第二刷発行

著 者 新 村 出

担当編者 土 井 忠 生
柗 源 一

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八
井 上 達 三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号 一〇一―一九一
電話 東京 〇七六五二(代表)
振替 東京六一四―一二三番
印刷 多田印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

落丁・乱本丁はお取替いたします

南蠻紅毛篇Ⅲ 目次

南蠻文学 (一)	7
----------	---

南蠻文学 (二)	63
----------	----

吉利支丹研究餘録	105
----------	-----

序 107

プラトンのことば	109	古逸吉利支丹小説の片影	112	吉利支丹文学残闕	116
『ひですの経』	123	愛著する海彼の吉利支丹版	125	薩道の事ども	129
若樹翁を憶ふ	131	摂津高槻在東氏所蔵吉利支丹遺物補遺	136	羅馬教皇宛	
大友宗麟書状に就いて	142	サンデ氏編述『天正年間遣欧使節記』序言	147		
『天正遣欧使節記』	150	遣欧青年使節と吉利支丹文化の移入	152	切支丹	
使節の羅馬入	174	南蠻文化について	179	南蠻文学の性格	184
味と茶道	192	京都の南蠻寺	204	所謂京都南蠻寺遺鐘の伝来に関する異	
説 207		日本二十六聖者	213	吉利支丹女性の話―細川ガラシャ夫人の事など―	216
『耶蘇会士日本通信』	224	グスマンの『東方伝道史』	227	大庭君の二著	230
『吉利支丹語学の研究』	233	天草版『金句集』	235		

文禄元年天草耶穌会学林開版の『平家物語』239 吉利支丹版『こんてむつす・むん地』―書誌序説―241 『こんてむつすむん地』の話249 マニラ版『日西辞典』についての大観254 『落葉集』の複刊に序す257 コイヤード『日本語文典』序259 吉利支丹研究五部書―姉崎博士の近著―260 『日南切支丹史』序文263 『キリシタン研究』序文265 ザビエルの渡来と西洋文化267 南蠻文化要略281

文禄旧訳伊曽保物語……………287

解説289 エソポが生涯の物語略296 エソポが作物語の抜書318 エソポが作物語の下巻337 エソポのフワブラスの目録364 洋語対照表368 画図解説370

『天草本伊曽保物語』序373 岩波文庫『天草本伊曽保物語』後記374
 『伊曽保物語』校訂の後に377 西洋文学翻訳の嚆矢―文禄旧訳の『伊曽保物語』―379
 『伊曽保物語』の漢訳396 『伊曽保物語』の旧代和本420 伊曽保餘考429
 伊曽保餘談434 伊曽保行脚442 伊曽保漫筆451 影模蘭文古版『絵入伊曽保物語』の断簡457 絵巻本『伊曽保物語』の伝歴469 天草版『エソポ物語』474 『エソップ物語』(一)478 『エソップ物語』(二)483

伊曾保物語展観目録	491
-----------	-----

イソップ	515
------	-----

アイソポス	531
-------	-----

イソップ物語（アルス日本児童文庫）	535
-------------------	-----

小山書店版後語	651
東京出版版あとがき	653
筑摩書房版あとがき	656
創	

元社版序	658
創元社版解説	659

私の『イソップ物語』	663
楽しい『イソップ』	667
人のはなし	669

解説	671
土井忠生	
終 源 一	

新村出全集 第七卷 南蠻紅毛篇Ⅲ

南蠻文学
(一)

目次

序説(南蠻文学の意味と範圍——その概観——用語等)	一	吉利支丹版の發達と訳者——書目など	二
支丹版宗門書(『サントスの御作業』——東洋文庫本『どちらな』——『ぎやどべかどる』——『こんてむつす』——『ひですの導師』——『懺悔録』)	三	写本類——破邪書	四
——『金句集』——『フロスクリ』——『朗詠集』——『伊曾保物語』)	五	語學書中の佚書	六
學 結語(日本文学史と南蠻文学)			

序 説

こゝに謂ゆる南蠻文学といふ言葉で以て、私は天文末欧人初渡以来凡そ一世紀にわたつて南蠻人が此国に齎らした西洋文学とその翻訳、並びに其等の新渡文学に動かされて我国文学の上に萌芽を示した新要素とを取扱ひ併せて異国趣味の文学にも触れてみたい。従つて其範圍は南蠻文学の根源とも云ふべき吉利支丹宗教文学即ち耶蘇教の教義、信仰、修養に関するものや聖徒殉教者伝を記した文学を主として、その副産物とも云ふべき、吉利支丹の手に成つた教外文学を含み、又彼等が編纂した内外文典辭書類からその資料を引用することもあり、更に反吉利支丹文学とも云ふべき排耶書類に係はることもあらう。

嘗て私は旧著に『南蠻記』なる書名を選んで以来、度々この言葉を私の著書に題して愛着してゐる。その語の由来の古くその響きの豊かなるを好むためである。元来南蠻なる語は古典の上では『孟子』に見ゆる「南蠻貊舌の人云々」が最も古く、主として南方の蠻族を指したもので、かの『後漢書』に至つて始めて南蠻伝が正史のうちに立

てられた。我國の文献では平安朝中期より史上に散見することは嘗て私の「日本と南國との關係」(本全集第五卷八四頁、足利時代に於ける日本と南國との關係)に録したごとくである。『日本紀略』一条天皇長徳三年の条に見ゆる「南蠻乱入」は高麗人であつたらしく、足利時代の辞書類にも南蠻の文字は見えるが古語の採録で当用の義を有しない。『糸乱記』にある応永頃の堺港に於る「呉越三韓南蠻」の船、『南浦文集』「鉄炮記」に新渡の葡人を指した「西南蠻種之賈胡」の文句は共に後年の追記であつて、西人渡日の初期には天竺又は天竺人と呼んでゐたことは天文廿年(一五五一年)の『大内義隆記』や同年のフランシスコ・シャビエル(Francisco Xavier)の書簡によつて明かである。翌廿一年の周防介の「造寺免許状」には「西域来朝之僧」とある。『信長記』の「唐土高麗南蠻之舟」、『大友記』の「南蠻国ヨリキリシタント云宗旨ワタリテ」、『大内記』の「唐土天竺高麗ノ舟」などは何れも欧人を南蠻天竺と呼んだ文献のうち古いものであらう。寛天正四年(一五七六年)京洛に建立された吉利支丹寺院を南蠻寺と呼んだ例もあるが是も後年の文学的命名であらう。寛永に入ると古俳書類に南蠻人南蠻舟の新取材がみえる。後れて正徳五年(一七二五年)の新井白石の『西洋紀聞』の始には潜入外人シローテ(シドッチ)が彼自身を指して「ロウマ、ナンバン、ロクソン云々」と云つた由録してゐて、當時尚歐人自ら南蠻なる語彙を知つてゐたことが判る。享和元年(一八〇一年)志筑柳圃訳の『鎖国論』には「我國の所謂南蠻人は伊斯波泥亜人、波爾杜互爾人を云へり、和蘭人をば紅毛人とこそ云へれ」とある。

かういふ變遷が南蠻の語義にあつたが、徳川期に入るとこの言葉は十六世紀中葉から來朝した西葡伊人及び彼等の將來した文化文物の總括的な名称となり、南蠻紅毛と対照せられて禁教後和蘭人の齎らした文物と區別せられた。しかし近頃坊間によく用ゐられる南蠻ものといふ語はこの二つを一括した意味である。本稿に私の指す南蠻は狭い意味のそれであつて、従つて禁教後の紅毛文学は之を省く。

南蠻文学の主潮とも云ふべき吉利支丹宗教文学を一瞥するならば、文禄初めから慶長末にかけて刊行された各種

の版本のうちに、『吉利支丹教義書』がある。これは教義の解明の爲には最も重要な宗門書であつたから耶蘇会印刷所創立の翌年にあたる文禄元年(二五九)には、早くも天草に於てローマ字綴本が出版せられ其後国字本二種ローマ字本二種合計四種が印行されたらしく、それら四種の異本が現存してゐる。修養書としては、当時広く歐洲で愛読せられたトマス・ア・ケムピス(Thomas à Kempis)の名著“De Imitatione Christi”即ち『基督の模倣』の抄訳が行はれたり、スペインの高僧ルイス・デ・グラナダ(Luis de Granada)の“Guia do Pecador”『悔心・悔心・悔心』が訳述されたりしてゐる。『サントスの御作業』といふ題で基督教の聖徒殉教者を記録した訳書は現存吉利支丹版の刊年の最も古いもので、其他『サルヴァトル・ムンデ』(『救世主』)や、『ひですの導師』一名『信心録』の訳編などあるが、いづれも教義の解明なり信心の手引なり修養の手ほどきを示したものである。此等の刊本と共に、教義を筆録した写本類も多少残つてゐる。是等宗門書の刊行に伴つて、内外教徒の爲の語学書も編纂印行された。アルヴァレス(Alvarez)式『拉丁文典』やカレピヌス(Calepinus)式『拉葡日対訳辞書』や『日葡辞典』やロドリゲス(Rodriguez)の『日本文典』などである。尚『落葉集』といふ邦字字書が新来の洋式印刷に附せられるやうな辞書史上に特筆すべき現象もあつた。此等の語学書は当時の我国に於る幼稚な下学集・節用集類に比して其組織の精緻にして学問的なることが著しく目につく。かゝる語学書の具備と共に、彼等は又教外文学からも其材料を選んで是を印刷した。文禄のローマ字綴『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』、慶長中期の国字本『太平記拔書』等これである。慶長十五年の拉丁文『聖教精華』は『金句集』が東洋古典からの抜萃であるに對し此は西洋の聖語金句を聚めたもので、尚昭和五年には吉利支丹版の『和漢朗詠集』がスペイン国王離宮エスコリヤルの一秘庫から木村毅氏によつて発見されるやうな喜ぶべき事もあつた。

此等の南蠻文学に用ゐられた用字用語発音に就て一言すると、現在吉利支丹版のローマ字綴本と国字本とは同数位である。彼等外人宣教師たちは其等の訳編書をローマ字で綴るのが便利であると考えて居たことは西教史上に有

名な字僧ワリニヤニ (Valignani) の天正十一年(三^五八)アクワヴィヴァ宛書翰にも表はれてゐて、その文中に、日本の少年達に読書を教へる場合、日本文字は数多くて印字製造至難であるから洋字活字を以て日本語を印刷すると云つてゐる。即ちローマ字を多く用ゐたのは、外人教師に邦語発言を理解せしめ邦人教徒には洋字洋語を学習せしむる為であつたが一面邦字活字鑄造の困難といふ障礙もあつたからである。しかしそのローマ字採用は現今のローマ字問題を想ふ時すこぶる進歩的な態度であつたと云へる。ローマ字本から遅れて印刷された国字本の漢字交り平仮名の活字は嵯峨本に見るやうな端麗な字体で、洋語もそのまゝ訳さずに仮名で写してゐる。用語に就て云ふと、教義書は弘道伝布を主旨とするのであるから平易通俗な当時の文語を主として用ゐ、その語彙、用ゐぶり、文脈は中世の仏教物語戦記類に類似する点も少くない。吉利支丹の宗教語が仏典語を藉りて訳されてゐるとともに、吉利支丹に特有な宗教觀念、神学思想を含む言葉は訳さずに原語のまゝ使つてその内容の異教化することを避ける一面、その特殊語に対する読者の注意を引くとき新工夫も用ゐてゐる。『平家』『伊曾保物語』の如き教外書には俗語口語を用ゐてゐる。慶長十年の『サカラメント提要』や『聖教精華』の如く原語で記したものもある。ローマ字綴本には写音法の嚴密な規則が行はれてゐた為、今日なほ当時の発音を知ることが出来、「母」^{はは}「父母」^{ふも}「一心不乱」^{いっしんふらん}の如き現行発音との差、「進退」^{しんたい}「養子」^{やうし}「雑談」^{ざつだん}とよむごとき清濁の変遷を明かにし、又半濁音符を新製使用する等の進歩もあつて、国語音の研究に資すること大なるものがある。

此等吉利支丹文学書は幸にも度重なる禁圧の厄を逃れ得たもので何れも内外の秘庫に数本を数へる天下の稀觀書であるが、他にもその書名のみ知られる吉利支丹古佚書が少く無い。今もし禁教の事なく鎖国の世とならずして、欧人との交渉が続いたとするならば、西洋文学南蠻文学と我が国文学との關係はどのやうな様相を示したであらうか。西葡伊人ら謂ゆる南蠻人の後に來た紅毛蘭人はその性情の然らしむる所、藝術的才能に於てよりも寧ろ実利実益

の方面に秀でてゐた為か、或は幕府の宗教政策が紅毛人に宗教文学の類を移入する余地を与へなかつた為か、蘭人を通じての西洋文学の輸入は幕末期までは殆ど見ることが出来ない。文献の上では天和二年(一六六八)和蘭甲比丹が元禄におけるケンベルの例のやうに江戸城中で小公子の余興に阿蘭陀歌舞を強ひられて其訳詩が遺つてゐたり、蘭学の祖青木昆陽が延享二年「和蘭陀勸酒歌」を吉宗公に上つたり、安永八年前野蘭化が家治の命に由つて拉丁文西洋画賛を訳したりした例は見えるが、いづれも文学的挿話の価値しか持たぬ。しかし明和八年から安永三年まで満三年以上を要した『解体新書』や文化初年から天保八年まで前後三十年を費した『ハルマ蘭日辞書』の訳編こそは、縦へ吉利支丹語学書訳書の精緻と広範に比することは出来ぬとしても、その苦心、その精励はわが国翻譯史上に忘るべからざるものがある。

同じ欧北に属する英国との通商関係は慶長十八年(一六四二)から元和九年(一六六二)まで僅か十年間にして平戸商館の閉鎖と共に終つたから、其間、万一わが国へ渡つた英人のうちに沙翁が故国に於る晩年の名声を聞きその名劇を観た者があつたとしても、この短い期間に何かの英文学資料を遺してくれたとは思ひも寄らぬ。沙翁の名は二世紀も後、天保十二年(一八四一)の渋川六蔵編『英文鑑』に至つて始めて見える。『基督の模倣』と共に宗教文学の雄篇としてその名を連想するミルトンの『失樂園』が出たのは十七世紀も中葉以後であつて、英人との交通を絶つて早や半世紀を経、バンヤンの『天路遍歴』は更に遅れる。一七二六年に出たスウィフトの『ガリヴァ旅行記』には日本を不死の国ラグナグの同盟国として紹介するやうな奇抜な記事があるが、五十年を経て安永三年に出た和莊兵衛の『異国奇譚』が『ガリヴァ』の翻案だといふ説はあつても、何等直接に日英文学の交流の証跡を指示することも出来ぬ。スウィフトと併び称せられたデフォーの『ロビンソン漂流記』の邦訳に至つては、原著の初刊の一七一九年から一世紀半も下つて幕末のころであり、然も蘭訳を通じての重訳であつた。

蘭英文学との交渉の殆ど見るものが無いに比べると、吉利支丹文化南蠻文学が我が国文化史文学史の上に遺した

足蹟は可なり広く深いのを覚えるが、その業績、影響、価値については後章に於て触れてゆくことにする。

一

吉利支丹版、即ち日本に於る耶蘇会学林の印刷所から発行された諸刊本についての研究は、サトウ卿 (G. Ernest Salow) が我が国学者に先だつて着手したことは世に知られてゐる。サトウ卿は始め日本の風物に憧憬を覚えて文久二年一外交官として来朝したが、明治十六年我国を去るまで前後廿年の外交官生活の間に、日本語研究から進んで日本印刷史書史の考究にまで及んだ。最初サトウ卿は日本の活字印刷が朝鮮よりの輸入と考へてゐたが、後には歐洲よりの輸入の行はれた形跡を発見し、日本を辞した後、英国其他歐洲各地の秘庫を採訪して日本耶蘇会版十四部の存在を知るに至つた。其等を解題した『日本耶蘇会版書志』(“The Jesuit Mission Press in Japan”)は明治廿一年百部限定私版を以て刊行せられ、後に之が増補も行はれた。尤も幕末明初における基督旧教の復活時代に、新渡の仏人宣教師らによつて九州辺の潜伏信徒間に伝はつた旧刊本写本口伝類の研究や翻刻が行はれたし、又我國側でも、明治以前、宝永年間に於る新井白石の海外事情や吉利支丹の研究があり、文化年間には大槻磐水が支倉六右衛門の遺品を考査した『金城秘鑑』の如き著も見え、寛政年間には水戸藩儒士立原翠軒の吉利支丹法器に関する著名な研究も表れ、明治以後も十年には大槻如電翁の『日本洋学年表』、十一年には『日本西教史』、十七年には北沢正誠らの『外交志稿』等の刊行があつたが、我國に於る吉利支丹研究はサトウ卿の名著によつて大なる刺激を与へられたことは争はれぬ。この著を先驅として明治廿年以後には日欧交渉史吉利支丹文化史についての各種の研究発表が陸続行はるゝに至つた事は拙著『薩道先生景仰録』(本全集第五卷四八七頁)に詳説した如くである。